

纏向型と呼ばれる出現期大型前方後円墳

この時期つまり三世紀前半に、纏向に突如として巨大な都市が出現した。その大きさは巻向駅北を中心にして東西二^{キロメートル}、南北一・五^{キロメートル}、広さ四平方^{キロメートル}に及び、唐古・鍵や吉野ケ里を凌いで邪馬台国時代の最大都市に発展していく。この都市が拡大する頃、纏向に最古の纏向石塚古墳が造られた。その後、南の箸中地区でも、矢塚古墳、勝山古墳、東田大塚古墳、ホケノ山古墳など纏向型と呼ばれる出現期大型前方後円墳が矢継ぎ早に築造された。

【纏向遺跡】(奈良県桜井市)、三世紀に始まる遺跡で、ここから一万枚以上の檜矢板を打ち込んだ大溝、多量の土器が出た。その中には、南関東・東海・北陸・近江・出雲・西瀬戸内海沿岸の土器が一五～二〇%も占める。その半数近くが東海系の土器、ついで出雲系が多い。

箸墓古墳の北約一^{キロメートル}から、ヒミコの宮殿と思しき三世紀前半の大型建物跡二が出土し、近くから祭祀に用いられた二千個を超す桃の種・大量の土器、木製品が見つかった。

中国の神仙思想では、西王母の手にする桃の実は、不老長寿の叶う果実とされてきた。

【纏向石塚古墳】、箸墓古墳などの前方後円墳が定型化する以前の全長九六^{メートル}の帆立貝形前方後円墳で、周濠から大量の土器、弧文円板と呼ばれる木製品が出た。同じ模様は楯築神社の神石にもある。最古の土師器が出土する纏向型前方後円墳の典型とされる。三世紀初頭の築造もしくは三世紀後半の築造とする考えがある。

【勝山古墳】、平成十三年の橿原考古学研究所の発表によると、この古墳の周濠くびれ部埋土中から大量に見つかった檜材は、年輪年代測定法による調査の結果、二〇三年～二一一年に伐採された木とされ、伐採後すぐに古墳上に建立されたとされる。

勝山古墳の築造期がヒミコの時代と重なることで、これまで弥生時代とされてきた邪馬台国時代が、古墳時代と判定されるに至った。一方、同時に出土した土器が従来の年代測定法

では三世紀後半にあたることから、以下の指摘もある。

「木材の伐採年と古墳築造時期を同一視する考え方、もしくは土器の年代測定法や年輪年代測定法のいずれかに問題がある」

【東田大塚古墳】(桜井市東田)、全長九六メートルの葺石された纏向型前方後円墳で、円墳部に幅二〇メートルの周濠を伴う。三世紀後半の築造とされる。

【ホケノ山古墳】(桜井市大字箸中)、古墳時代前期初頭に、箸墓古墳東の丘陵に築かれた全長八〇メートルの帆立貝形前方後円墳で、葺石と周濠を伴う。副葬品や埋葬施設から、箸墓古墳や椿井大塚山古墳で代表される定型化した出現期大型前方後円墳の時期をあまり遡らない三世紀前半～中葉の纏向型前方後円墳と見られている。

後円部中央に設けられた石囲み(長さ七メートル、幅二・六メートル、高さ一・五メートル)内に高野槇製の木槨が設けられていて、そこに平縁の画文帯神獣鏡一、素環頭太刀一口、鉄製刀剣類十口などが残されていた。木槨内部は水銀朱で覆われていた。